

縄文から弥生にかけてのモチーフの形成

奈良大学 小林青樹

1. 本日の要点

岡山の弥生時代はじめ頃の土器の文様モチーフの起源と意味について考える。

2. 弥生時代のはじまり（概説）

最初に弥生時代のはじまりから、弥生土器の文様モチーフが出現するまでをざっと見ておこう。

①縄文時代と渡来人（図①） 渡来文化を伝えた人の姿★①：石井礼子画。弥生時代の渡来人は、身長160cm、面長、顔は平たくのっぺり。縄文人は毛深く、低顔（寸詰まり）で身長155cmと小型、全く見た目が違う。

②渡来人の土器（松菊里遺跡の土器）（図②）

韓半島の農耕社会の土器は無文土器と呼ばれ、粗雑で無文の土器。

③渡来人の文化（図③）：韓半島には環濠集落があり、住居は円形で炉が中心にある松菊里型住居であった。また戦争に関わる磨製石剣を有し、支石墓と呼ばれる墓壇の上に巨大な石を載せる墓もあった。これらはすべて形を変えながら日本列島に伝わった。

3. 弥生文化の成立と東方への伝播

①弥生文化の形成

弥生文化は、前950年頃に玄界灘沿岸（佐賀）に最初の水田稲作が開始され早期の文化が誕生した。この早期は縄文系の突帯文土器を作る集団と韓半島からの渡来人集団が共存し、渡来人が新しい土器の製法を伝えた（図④）。しかし、100年ほど異なる文化が併存したままで、前800年頃に福岡平野の板付遺跡において縄文系と韓半島系の伝統が融合した前期文化が形成された（図⑤・⑥）。

そして、板付遺跡で誕生した土器は、その後すぐに東方に拡大し、似たような土器を各地で作るようになった。こうした土器を「遠賀川系土器」と呼んでいる。この遠賀川系土器が最初に各地に伝わったことにより、同時に各地で稲作がはじまり本格的な弥生文化がはじまった。しかし、2003年に新しい弥生時代の年代が決まってから、その伝わりかたが非常に遅かったことが判明し、九州から岡山まで到達するのに約200年くらい要した。こうして遅れた背景には各地に見えない「縄文の壁」があり、この縄文の壁を越えながら弥生文化が伝播した「縄文の壁弥生文化伝播論」を私は考えた。

②縄文の壁弥生文化伝播（図⑦）

「縄文の壁弥生文化伝播論」とは、日本列島の陸地を東方へ拡散する伝播現象である。この伝播は、北部九州での出発から関東にいたるまで500年ほども要しており、狭い日本であるのに、なかなか東へ伝わらないという特質がある。この背景には、伝播の過程のなかで途中で所々に見えない壁があると考え。これを「縄文の壁」と呼び、この壁を越えながら陸地を東進する文化伝播を「縄文の壁弥生文化伝播論」とした。

③岡山平野における弥生土器の形成過程（図⑧）

岡山平野では、最初に岡山平野の津島遺跡に板付遺跡と同じような土器をもつ集団が移住した。この津島遺跡周辺では、半径1km圏に津島岡大遺跡のような縄文系の突帯文土器を使用する縄文系集団と初期の弥生土器（遠賀川系土器）を使用する集団が共存し、一方4km先に沢田遺跡のような縄文系の突帯文土器を使用する集団と対立していた。こうした対立関係を経て、さらに弥生文化は東方へ拡大したが、各地の縄文系集団は容易に新しい文化を受け入れなかったこともあり、東海の尾張付近に前350年頃まで足止めされ、関東に伝播したのは実に前200年頃、岡山に弥生文化が伝わってから約500年後であった（図⑦）。

④津島遺跡の前期遠賀川系土器の文様（図⑨）

岡山平野の最古の弥生土器の文様は、線刻による重弧文、矢羽状文、木の葉文などがある。特にこれらのうち、重弧文は九州から東海付近までのかなり広い範囲の弥生文化に流行した文様であった（図⑩）。

4. 縄文系集団の弥生土器文様形成への関与

以上の話は、弥生文化は大陸から伝わりやがて東に伝わっていったという昭和の頃に考えられた仮説で、実はその後話は大きく変化した。実は、弥生文化の形成に最も縁遠いはずの東北の縄文人が大きく関与していたことが判明したのである。

①東日本系土器の西方展開 図⑪：

北部九州では板付遺跡で前期の初頭の文化が誕生した段階、前800年頃に、東北北部の縄文時代晩期後半（大洞C2式からA式古）段階に、東北地方から北陸地方の土器が一斉に西方へと伝播する現象が見られる（図⑪）。東北の縄文人が稲作開始に反応し西方に広域展開していた。

そして、こうした東日本系土器のなかに非常に重要な土器群があった。以下のその事例をあげる。

②福岡市雀居遺跡の亀ヶ岡系土器（図⑫）：東北北部から持ち込まれた土器。表面に漆で文様をつけている。

③佐賀県唐津市大江前遺跡出土の亀ヶ岡系土器

（図⑬）：粘土の細かい紐を貼付けた③雀居遺跡・板付遺跡出土土器（図⑭）：雀居遺跡は、板付遺跡に近接する。「隆線重弧文」をもつ特殊な壺が出土している。

5. 縄文系文様から弥生文様へ

①隆線重弧文から沈線重弧文へ（図⑩）

東北の亀ヶ岡系の文様である「隆線重弧文」は、図⑩のように1の大江前遺跡の隆線重弧文などが元になり、これを3のようにへうで描いて沈線文化し、「沈線重弧文」が誕生した。この文様は、前期の弥生土器の典型的な文様で、岡山市津島遺跡にあった沈線重弧文の祖型である。

②その他の弥生文様の祖型となった縄文系文様

・雀居遺跡出土土器の矢羽根状文壺（図⑮）：雀居遺跡からは、他に北陸系の矢羽根状文をもつ土器もある。

・雀居遺跡出土土器の流水文壺（図⑰）：雀居遺跡からは、さらに流水文をもつ土器があり、これは亀ヶ岡系の工字文が祖型である。

③流水文の受容（図⑱）：亀ヶ岡系の流水文は、中四国から近畿地方の前期弥生土器の文様として積極的に受容された。

④近畿地方の流水文・工字文資料（図㉑）

近畿地方の流水文は、土器の他に骨格器や木器にまでつけられ、後期の流水文の例もある。

⑤銅鐸文様縄文文様起源説（図㉒）

銅鐸の文様は、東海地方から北陸地域で亀ヶ岡系や北陸系、浮線文系土器などの縄文系文様を受容して形成された。

以上のように九州から西日本一体の弥生文化の土器の文様の多くは縄文系の文様であった。

6. 東北亀ヶ岡系集団が九州に行った証拠

それではなぜ東北の亀ヶ岡系文化の集団など縄文系集団は弥生文化形成期に北部九州や西日本各地に行ったのか？ここでは、九州と東北との交流の実態について見ていこう。

北部九州からは青森県八戸市の亀ヶ岡系文化の漆器など珍しいものがたくさん出土しており、交流が盛んであった。

①北部九州出土漆器類（図⑲）：雀居遺跡からは、青森県是川中居遺跡の漆器とよく似たものが多数出土。樹皮製容器や飾り弓、腕輪などがある。

②是川中居遺跡出土漆器（図⑳）：樹皮製容器や飾り弓、腕輪などの例。

③北部九州と東北の相互交流（図㉓）

また、東北から北海道にかけて、稲作開始期に限り、南島産のイモガイの螺頭部の渦巻きをもつ部分のアクセサリーが流行する。貝製、土製、石製がある。東北縄文人と北部九州、さらに南島との交流を示すように、亀ヶ岡系文化の大洞系土器が南島各地で発見されるようになった（図㉕）。図㉖の平安山原B遺跡出土の大洞系土器は沖縄本島での最初の発見例である。その後、東北地方の大洞系土器の文様をもつ紡錘車（糸を紡ぐ道具で韓半島から北部九州に伝わったもの）が南島で出土し、東北の縄文人が九州を経由して沖縄諸島に行っていたことが明らかとなった（図㉔）。

このような交流は、交易で偶然遠方にまで行ったというのではなく、もはや意図的なものであり、しかも沖縄諸島をも含めた実にダイナミックなものであった。弥生文化の形成は思ったよりも縄文文化の影響を受けたのであり、その一つである土器の文様も縄文系であった。

なお、こうした縄文系に起源する文様は弥生時代には壺にまず施された。なぜ、壺に縄文系の文様を施す必要があったのであろうか。

7. 祭祀の中心としての壺

①赤く塗られた聖なる容器としての壺（図㉑）：なぜ、農耕社会開始時期に壺に文様がほどこされたのか？それは、壺の祭祀における重要性が背景にある。壺は、赤く塗られた聖なる容器で、種籾収納用。翌年の種籾の再生をはかる容器で、そこから再生の象徴（女性格）と考えられる。

②壺の祭祀的重要性を示す資料（図㉒）：狩猟文鏡とされる伝高崎出土の古墳時代前期の鏡や、韓国の青銅器の絵画に、壺が稲とともに描かれている。

③祭祀装置としての壺

壺が弥生文化で聖なる器となった理由は以下のように整理できる。

- ・種籾収納容器：（種籾の守護）
- ・祭殿脇の溝（祭殿の守護）
- ・環濠や集落縁辺への廃棄・集積行為（集落の守護）
- ・水口祭祀（水田の守護）（図㉔・㉕）
- ・墓壇内（死者にとりつく悪霊からの守護）

以上のようにほとんどの弥生文化の祭祀の中心に壺は位置付けられていたようである。

7. まとめ

以上のように、弥生時代の前期以降に貯蔵用の器として日常生活だけでなく、祭祀などに用いられた壺は、縄文系の文様を施され生まれた。縄文系の文様は、銅鐸にも受け継がれているように文様自体にも祭祀的な意味があり、象徴性の高いものであった。おそらく壺に納められた翌年の種籾を収納している間、聖なる壺であり、外部からよくないものが侵入され侵されないよう壺を守る魔除けのような意味を有していたと私は考えている。こうした祭祀性を帯びた文様であるからこそ、西日本のかなり広い地域に文様自体はあまり崩れずに伝わったのであろう。

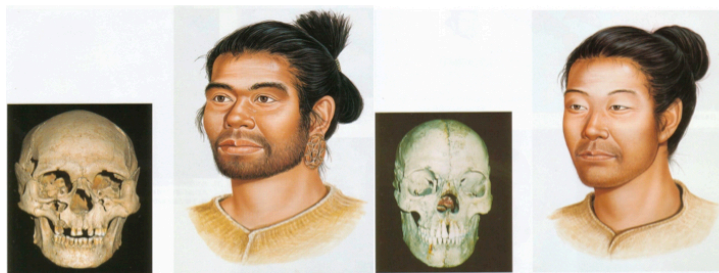
おそらくこうした文様は身にまとう衣服にもつけられていた可能性が高く、弥生人の心身を守る大事な文様であったと考える。

参考文献

- ・ 広瀬和雄編2007『弥生時代はどう変わるかー炭素14年代と新しい古代像を求めて』（歴博フォーラム）、学生社
- ・ 小林青樹2017『倭人の祭祀考古学』新泉社

① 渡来文化を伝えた人の姿

弥生時代の渡来人は、高身長（160cm）、面長、顔は平たくのっぺり。縄文人は毛深く、低顔（寸詰まり）で身長（155cm）と小型、全く見た目が違う。



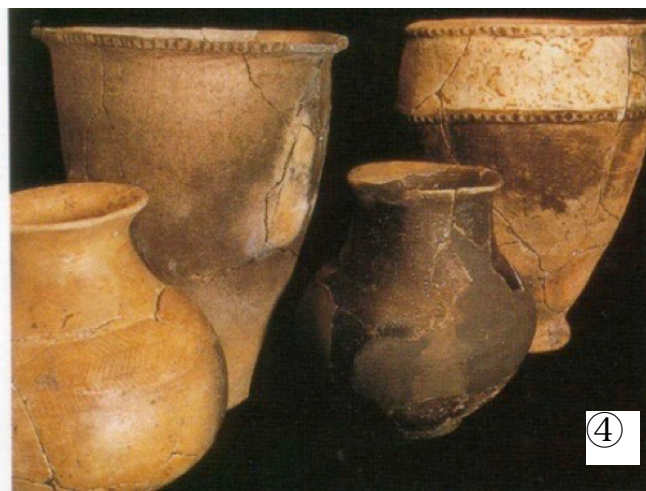
縄文人

渡来人



②

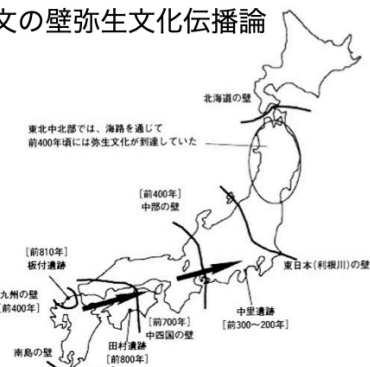
③ 韓国松菊里遺跡の稲・住居・磨製石器



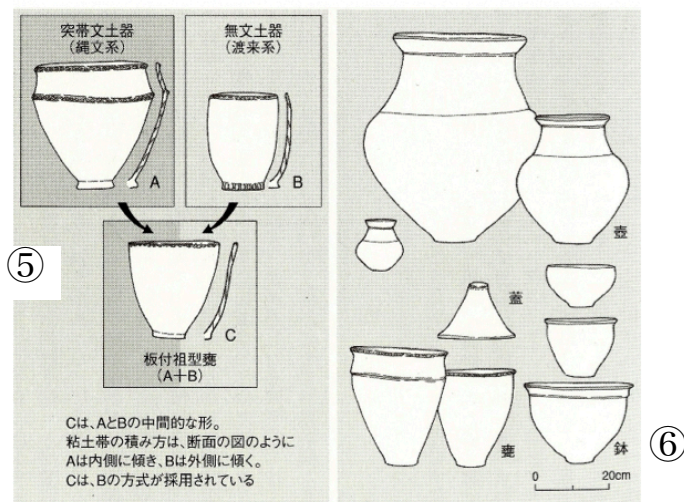
④

福岡市板付遺跡の土器

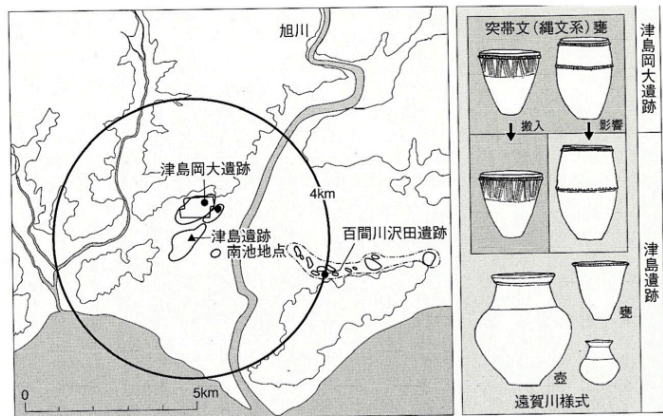
⑦ 縄文の壁弥生文化伝播論



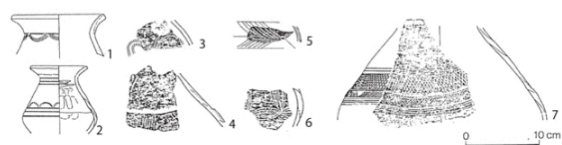
パケツ・リレー式伝播を妨げる縄文の壁
矢印のように陸路を進む弥生文化の波は、縄文の壁によって伝播の速度が遅くなった。
海路による伝播は、田村遺跡などのように点的に陸路よりも早く拡散した。



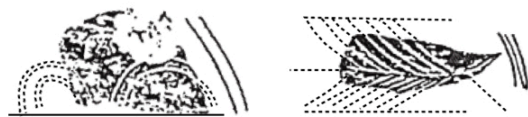
⑥



⑧ 図5(左) 岡山平野・旭川流域の津島、津島岡大、百間川沢田の3遺跡
図6(右) 津島遺跡における縄文系・突帯文と遠賀川様式の共存



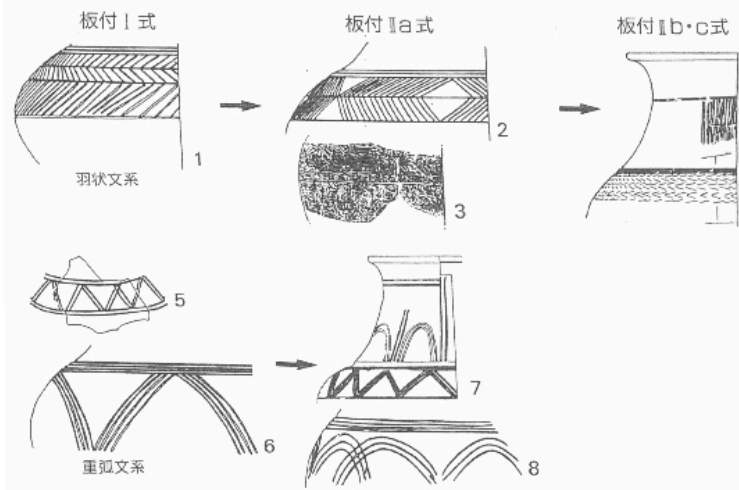
⑨ 岡山市津島南池出土弥生時代前期の土器文様



沈線重弧文

沈線矢羽状文

⑨ 津島遺跡出土前期土器文様拡大



⑩ 弥生時代前期の土器文様の変遷



⑫ 福岡市雀居遺跡の亀ヶ岡系土器

佐賀県唐津市大江前遺跡出土

⑬ 亀ヶ岡系土器

波頂部が平坦をなす



2条の隆線重弧文土器



隆線連子文土器

⑮ 雀居遺跡出土土器

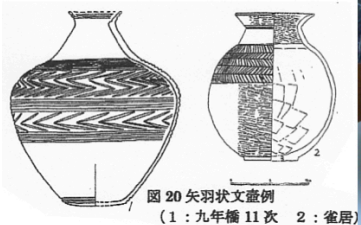
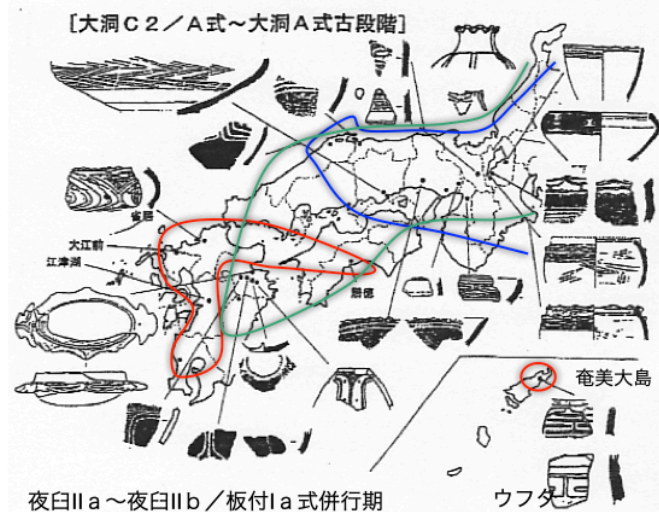


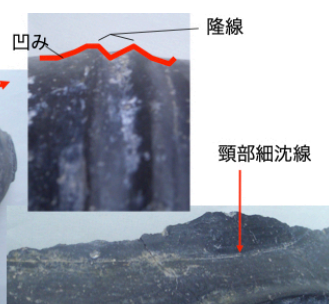
図20 矢羽状文書例
(1: 九年橋11次 2: 雀居)



⑪ 西日本における東日本系土器



⑭ 雀居遺跡・板付遺跡



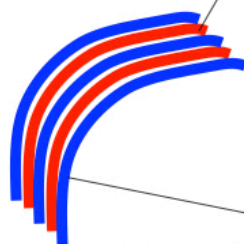
雀居遺跡出土土器



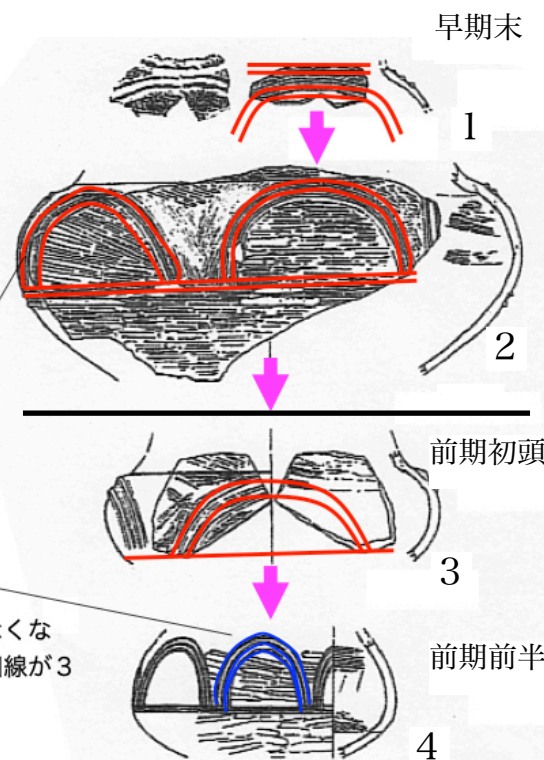
板付遺跡出土土器

隆線重弧文 から沈線重 弧文へ

2条の隆線表現



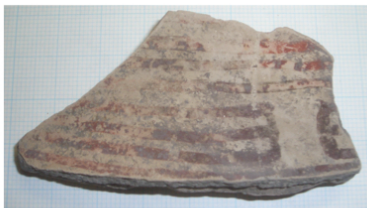
隆線表現がなくなり、側縁の凹線が3条沈線化



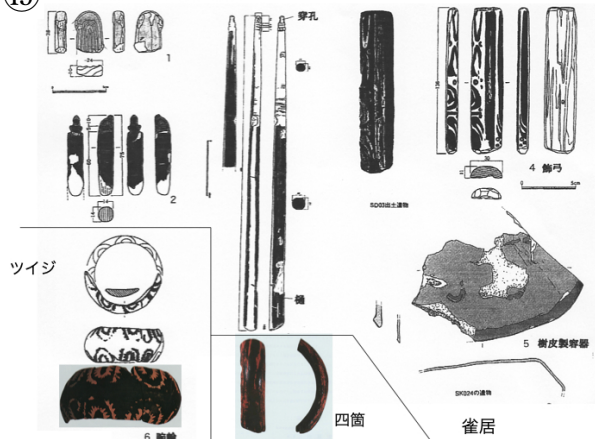
⑯ 隆線重弧文から沈線重弧文への変化



17 雀居遺跡例



19 北部九州出土漆器類



21 近畿地方における流水文・工字文資料

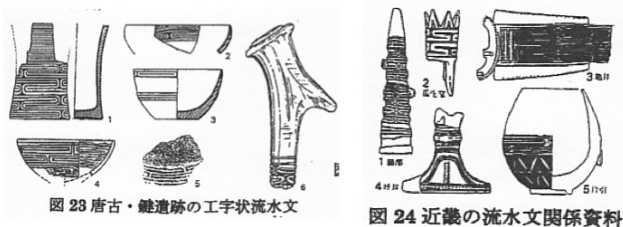


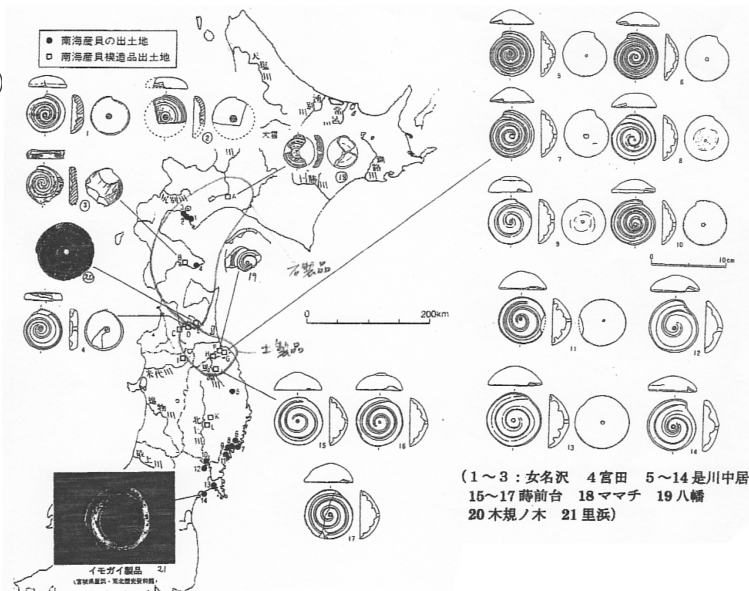
図 23 唐古・鍵遺跡の工字状流水文

図 24 近畿の流水文関係資料



図 26 櫛描流水文各種例

23



18 縄文系流水文の受容



図 21 鳥屋 I 式の流水文状工字



図 22 石川県金沢市八日市地方遺跡出土土器 (1~4)・鳥屋 I 式流水文状工字



図 25 徳島県徳島市三谷遺跡

20 是川中居遺跡出土



22 銅鐸文様の縄文起源説

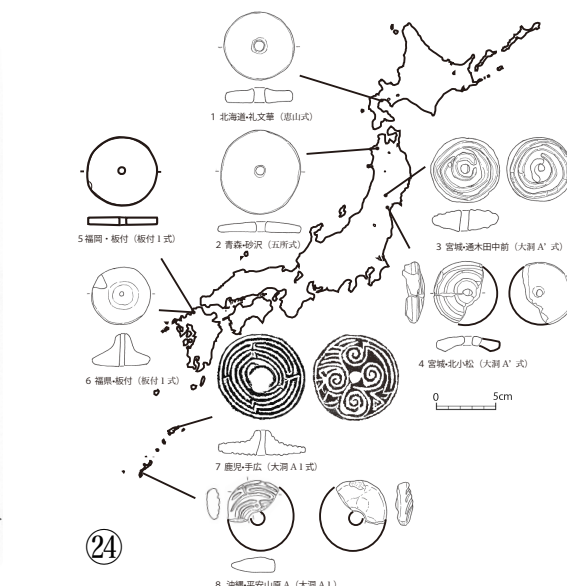
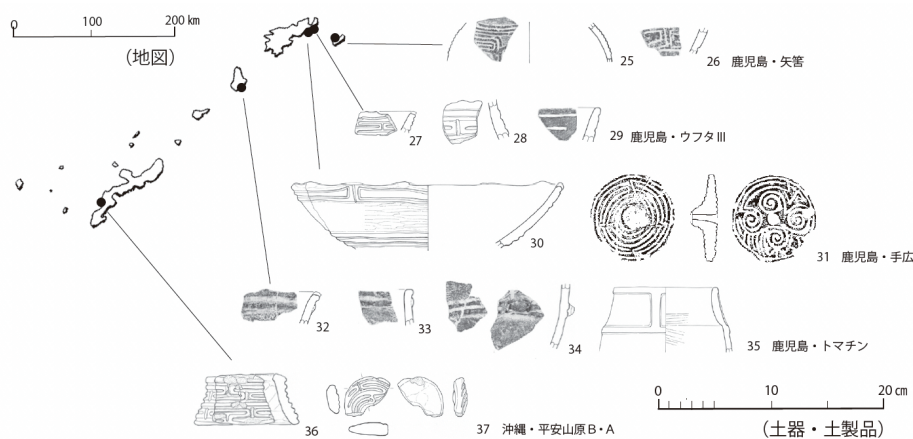


図 4 前期弥生文化併行期の北と南の紡錘車と関連資料 (5 は石製, 他は土製)



②⑤ 南島出土の大洞系土器



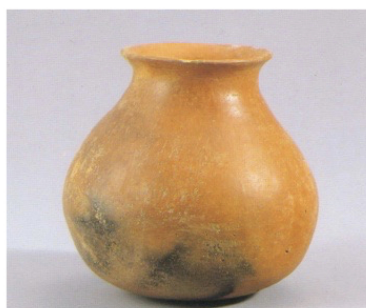
②⑥ 平安山原B遺跡出土の大洞系土器



②⑦ 津島岡大遺跡の弥生時代前期の堰と水口



②⑧ 水口付近から出土した壺



朝鮮半島
無文土器壺

②⑨ 祭祀の中心としての稲と壺

- 赤く塗られた聖なる容器
- 種籾収納用
- 種籾の再生／再生の象徴



③⑩ 壺の祭祀的重要性を示す資料

- ・ 韓国の青銅器絵画
- ・ 伝高崎 狩猟紋鏡の鹿と壺と稲？の絵画

